

に、どれだけ正確な地図に似せて描くかを問題にするのではなくて、市井の人々がどのように国を構造化して頭の中に描いているのかを調べてみたい。首都を含む主要な都市と主要な交通路網とからなりたっているのだろうか。それとも、主要な地形が入った地図なのだろうか。それとも、いくつかの□□地方からなりたっているのだろうか。

最後にあげた□□地方というのは、きっと万国共通の認識の仕方であろう。そのなかでも、国を大きく二つないし三つ程度に地域区分することがかなり普遍的であると思われる。日本を東日本と西日本と分けるのは、歴史的にも文化的にも、あるいはもっとほかの面でも、それなりの理由があることには相違ないが、ほかの国々でも似たような二大地域区分というのが多いらしくみえる。小さなムラなどに双分制があることは、社会学でも地理学でも研究があって、双分制はムラを維持していくのに重要な機能を果たしているともいわれる。国の場合は同じなのだろうか。私はそれが何かの機

能を果たしているというよりは、それこそ「頭の中の地図」で二つに分けることがいちばんわかりやすくて、いい認識方法だから、これがどこの国でも採用されているのだろうと考えている。

こんな考えは、毒にも薬にもならないヒマ人の考えと思われるかもしれないが、地理教育でよその国を教えるときのことを思い出してみよう。その国の自然、文化、貿易などを教えることはあっても、その国の「地図」をどれだけ教えているのだろうか。主要都市や目立った地形の位置を教えるかもしれない。それは都市の立地と地形との関係を理解させるなどの意味では重要である。しかし、人間の頭は寸分違わない地図を描くことが不可能のだとしたら、頭の中にいちばん入りやすい形の地図を教える教育が行なわれていいのではあるまいか。そのためにも、「頭の中の地図」が一体どんな地図なのかということを、もっと研究してみたいものである。

(駒澤大学)

## 政治地理学の季節の再来

斎藤 毅

### 1. 「国家の時代」と政治地理学

現在の日本では、政治地理学が著しく不振である。戦時中の「地政学」の後遺症から、今なお脱しきれないのかも知れない。

好むと好まざるとにかかわらず、日常生活のすみずみにまで政治がかかわり、さらには政治現象の源泉ともいえる多様な国家がこの地球を被い尽しているのを見ると、まことに現代は「国家の時代」の観が深い。

とかく“政治離れ”が話題になる若者達も、実は国際政治への関心は決して低いものではない。このことは、例えば「国際関係論」が意外に多くの学生達をひきつけていることからもうかがわれる。もっとも、現在の国際関係論の内実は、その創始者の一人であるE・H・カーがそうである様に、政治史の一分野にとどまり、必ずしも政治地理学の発展を刺激するものとはなっていない。

### 2. 政治地理学の地平の拡大

政治地理学の一般的なイメージからは、領土問題を含む国境論などが中心テーマと考えられがちである。国内の町村合併問題などもその延長といえよう。

こうした問題に関心をもちながらも、オリジナルな研究を手掛けることのなかった筆者が、現代の政治地理学の新たな展開について再認識し、その可能性を再発見したのは、1982年に英国で創刊された《Political Geography Quarterly》に出合ってからである。ここには、“カナダの二言語問題”や“少数民族の文化”等々、現代の政治と深くかかわる文化地理学的諸問題を扱った論文が少なくなかったからである。

文化史的な現象や、ときに好事家的とさえいえる民族現象に関心が偏りがちとなり、とかく浮世離れた文化地理学の研究を手掛けてきた筆者にとって、これは著しく刺激的であった。

### 3. 新しい座標軸としての可能性

1960年代を境いに、人文地理学は、研究対象についても方法論的にも著しく多様化した。が、しかもなお、その中心的な対象から政治現象はすっぽり欠落したままとなっている。

一国の経済はもとより、国際経済とて政治なしではもはや機能し難くなっている現在、政治地理学は、経済地理学や文化地理学に十分比肩し得る第三関心をもち

ながらも、オリの研究分野を形成してしかるべきものであろう。同時に、地誌構成における不可欠な視角をなし得るものでもある。

実際、少なくとも国際的にみる限り、政治地理学は静かなブームを迎えはじめている。その方法論の再構築が当面の課題ではあるが、遠からず経済地理学や文化地理学と並ぶ新たな座標軸となる可能性をもっている。

政治地理学は、その伝統的な研究テーマとも言える市町村合併や住民の投票行動はもとより、考えてみれば、自然保護や地名、歴史景観の保存問題でさえ、とり込むことができる。これらの諸問題に対して政治地理学的の視点が加わることによって、一種の“生臭さ”が加わり、それと共に、かえって現実の地域問題の解決への期待が高まることとなる。10年前のデヴェュー当時の

新鮮さが今ではすっかり失われた「地域主義」も、政治地理学の観点が加わることによって、再び活力を取戻すに違いない。勿論、日本では極めて観念的にしかとらえられていない防衛問題も、密室へ追いやることなしに、もっと具体的な姿で国民的な論議の対象となし得よう。

「日本政治地理学会」の存在を御存知だろうか。この学会名は、日本地理学会の会員名簿に「関連学会」の一つとして掲載されており、その事務局は東京学芸大学地理学教室におかれていることになっている。しかし、大変残念なことに、現在のところ目立った活動も行われぬままに、いわば“休眠”状態にある。女性の政治への目覚めが著しい現在、その再建に力を貸して下さる方は居られないだろうか。

(東京学芸大学)

## ワープロ

野上道男

最近はこの大学の研究室にもパソコンとワープロソフトがある。ワープロの業界は競争が激しいので、1年も経たないうちにバージョンアップと称して新製品を売り出す。最近の新製品は機能が追加されているだけでなく、操作性(使い勝手)も良くなっているとうたわれている。しかし新製品ではそれまでの操作方法が変わるわけだから、慣れるまでに若干の時間が必要となる。

このときユーザーによって2つの反応があるのが面白い。一つは、「とにかく新しいのだから良いに違いない」と言うわけで、すぐに新製品に飛びつく新しいもの好き派である。もう一つは、「せっかく慣れたのだし、新機能といったところで、それほど違わないだろう、それよりこの製品をじっくり使いこなす方が良い」といういわば保守派である。

最初の頃は、単漢字・音読み入力だったのに、あっという間に、連文節・自動変換という時代になったのだから、新しいものはすなわち良いものであった。しかし最近のようにワープロの機能が充実し、一方では、ユーザー側でも慣れというかたちで技術が蓄積されて来ると、機能と使用技術の和(積かも?)として発揮される生産性がどうかということが問題となる。新型ワープロに対する評価に個人差が生じてくるのは当然とも言

える。

話が飛躍するけれども、箸を使う場合技術の蓄積が必要で、新型の箸が求められているわけではない。道具としてのワープロは、箸の方向に向い始めたと言える。道具と人間の関係はそれが成熟してくると、作法などというものが登場し、大げさにいうと文化にも関わって来る。日本語ワープロのソフトは、大学の台帳に載せるとき、ちょっと首を傾げたくするような、伝統的な日本語の商品名が付いていることが多い。名前だけだと思うが、ワープロ作法というような書籍もあるようである。

私はどちらかと言えば、新しいもの好き派だから、あるワープロソフトを使いこなせるようになる前に、新しいソフトに切り替えるというような無駄なことを繰り返してきた。しかしこれは性分の一つだからどうしようもないと諦めている。現在期待している新製品は、音声入力が可能なワープロである。

講演などをカセットで録音し、後でワープロにつないでそのまま文章に直せたらずいぶん便利だろうと思う。しかし立場を変えて、学生の皆さんに活用されて講義録などを作られるのは、うっかりしたことは言えないので、教える側から見るとあまり歓迎できることではない。話言葉としては十分に理解できるのに、文章に